

施設キュウリにおけるマンゼブ水和剤 散布条件下でのパック製剤からの スワルスキーカブリダニの分散・定着

研究のねらい

施設キュウリ栽培において、スワルスキーカブリダニ（以下、スワルスキー）はコナジラミ類、アザミウマ類を捕食する有用な天敵資材として実用化されています。しかし、キュウリは褐斑病やべと病等の病害も発生しやすいため、殺菌剤の散布が必要不可欠となっています。近年、小型紙パック内にスワルスキーを充填した製剤（写真）が農薬登録されました。パック内で保護されながらスワルスキーが徐々に放出する特徴から、薬剤散布による影響の緩和が期待されます。

そこで、スワルスキーに影響のある殺菌剤であるマンゼブ水和剤散布条件下で、パック製剤とボトル製剤からのスワルスキーの分散・定着を比較検討しました。

技術の特徴

- 1 ボトル製剤で、スワルスキー放飼7日後にマンゼブ水和剤を散布した場合、散布14日後には無散布と比較してスワルスキーの個



写真 スワルスキーカブリダニのパック製剤
（商品名：スワルスキープラス）

体数が少なく定着が抑制されました（図）。

- 2 パック製剤でスワルスキー放飼7日後にマンゼブ水和剤を散布した場合、散布14日後においてもスワルスキーは無散布と同等にキュウリ株間を分散し、定着しました（図）。
- 3 以上から、パック製剤は放飼7日後までにマンゼブ水和剤を散布した場合においても分散・定着に影響を受けないことが明らかとなりました。ただし、スワルスキーがパック内から十分に放出した後は、ボトル製剤と同様に影響の少ない薬剤を散布することが望まれます。

今後の取り組み

スワルスキーに影響のある他の殺菌剤等についても同様の検討をする予定です。

（執筆者：吉澤 仁志）

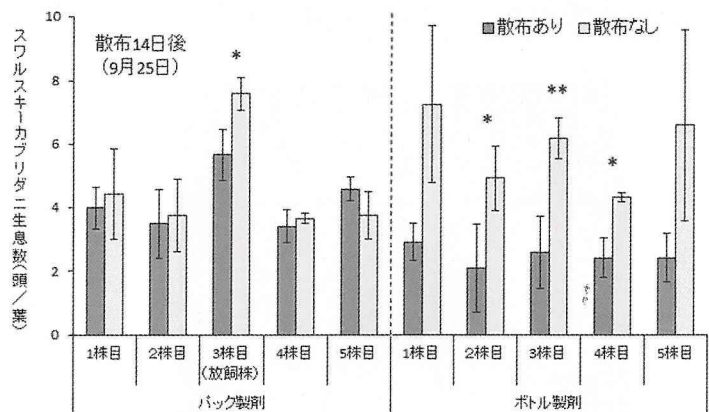


図 マンゼブ水和剤散布によるスワルスキーカブリダニの分散・定着への影響 注) t検定により*は5%水準、**は1%水準で有意差があることを示す。また、グラフ上の垂線は標準偏差を示す。スワルスキーは9月4日に放飼し、ボトル製剤は各株に放飼した。